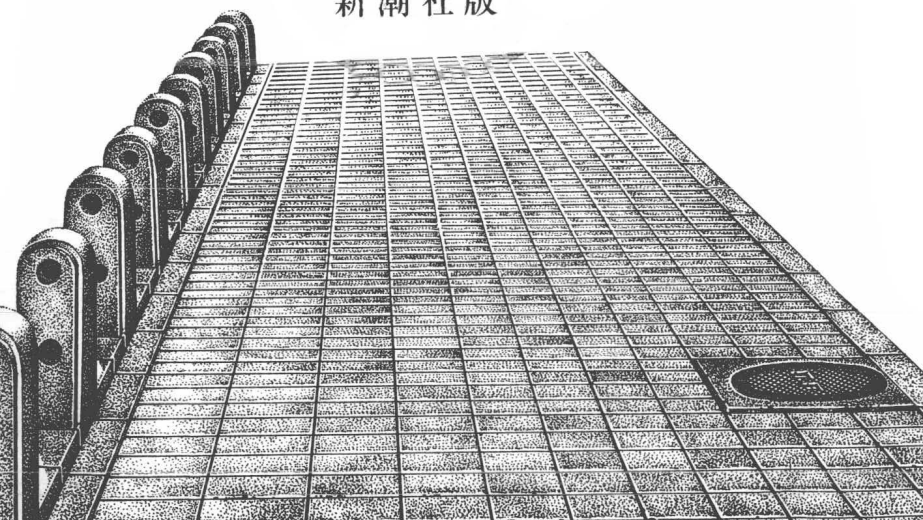


の夏

城山三郎

新潮社版



官僚たちの夏かんりょう

昭和五十年六月十五日 発行
昭和五十年九月二十日 七刷

定価七八㊦円

著者 城山三郎しろやま さぶろう

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話業務部〇三二六六一五一
編集部〇三二六六一五四一一
振替 東京四一八〇八番
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社
通信係宛御送付下さい。送料小社負
担にてお取替いたします。

官僚たちの夏・目次

第一章	人事カード	五
第二章	大臣秘書官	六
第三章	対立	七
第四章	登退庁ランプ	一〇
第五章	権限争議	一四
第六章	春そして秋	一七
第七章	冬また冬	二五

装帧
齐藤和雄

官僚たちの夏

第一章 人事カード

風越^{かぎこ}信吾は、悠然と大臣室から出てきた。

もともと怒り肩の肩をつり上げ、両手を開きかげんに振って、外股で歩く。堂々として、大臣室の主のようであった。だが、風越は大臣ではない。次官でもなく、局長でもない。風越の身分は、大臣官房秘書課長。省内最右翼の課長とはいえ、一課長に過ぎない。

風越は、上着もネクタイもつけず、ワイシャツの襟ボタンをはずし、両腕の袖をまくり上げていた。煉瓦造りの古い建物は、風通しがわるい。だが、季節はまだ初夏である。盛夏ならともかく、いまから平気でそうしたかっこうをしているのは、省内では風越くらいであった。

大臣室にも冷房はないが、通産相の竹橋でさえ、ネクタイはもちろん、きちんと上着をつけていた。その大臣を見下すようにして、風越は、ノーネクタイ、ワイシャツの腕まくりの姿で、しゃべってきた。人事についてのいくつかの大臣の諮問に答えたのだが、それは、答弁の域を越え、雄弁をふるうという感じであった。

かつて自由主義経済の論客として鳴らした大臣の竹橋だが、高齢のせいもあり、また、官僚機構

にはのっかっているだけが得という判断もあって、風越の勢いにのまれたふりをし、小さな木彫りのような顔をしてきいていた。

風越がひととおり話し終ったところで、大臣は、思いついたようにいった。

「ところで、きみ自身のことは、どう考えているね」

風越は、間髪をいれず、大声で答えた。

「もう一期、続けてやらせてください」

「大丈夫か。人事は気をつかう。一期つとめるだけで、ふつうはノイローゼになるものらしいが」「いや、わたしは逆ですよ。わたしは、いちばん、人間に興味があるんです。だから、もっともつと、これはと思う人事をやってみたい。あたりさわりのないトコロテン人事を、この通産省からしめ出したいんです」しゃべっている中に、風越の声は大きくなった。「うちの役所には、ばらまくほどの予算があるわけでなし、許認可権もいまはたいして残って居りません。行政指導だけで業界をひっぱって行かねばなりません、それだけに、衝に当る役人の能力や個性が問題です。入省年次順に役人を並べておけばすむような役所とはちがいます。よほど魅力的な人間を育て見つけて、適所に配置しないと、いつか、動きがとれなくなるんです。それには……」

「わかった」

大臣は、手を上げて、風越の雄弁を遮ると、少しからかうように、

「きみは、よほど、人事が好きなんだね」

風越は、わるびれず、

「ハイ、好きです」

「うわさによると、きみは、どこかの課長補佐の時代から、省内人事の予想屋みたいなことをやっていたというな」

「なにしろ、人事異動に興味があつて、つい、わたしなりに予想を立ててみたくなるものですから。そこへ、おもしろがつて、みながききにくるようになって。ただし、予想屋といわれるほどには、わたしの予想は適中して居りません」

「ほう、どうしてだね」

「わたしの予想は、通産省はかくあるべしという理想の人事をいつも並べるのでして……。むしろ、予想屋というより、理想屋というべきかも知れません」

「理想どおりに行かぬことが多かった、というのかね」

「ハイ。担当者に、人間を見る目がなかったということにもなりますか」

大臣は、そっぽを向き、もう物をいわなかった。風越の自信に圧倒されるとともにへどこまで押し強い男かと、半ば興ざめた表情でもあった。といって、風越をどうこうする気もない。最終の人事権は、大臣の掌中であり、この男をとばすこともできるのだが、竹橋は、この風越課長が若い役人たちにいつも吹聴しているという言葉を、不快の念とともに、思い出した。

へおれたちは、国家に雇われている。大臣に雇われているわけじゃないんだ」
一筋ナワでは行かぬ相手であった。

通産省には、外局をふくめ、二百以上の課長職があるが、その中でも、将来の次官コースと目される最高の椅子が、官房三課長、つまり、大臣官房秘書課長・同総務課長・同会計課長の三つのポストである。

三課長の仕事は、いずれも、民間会社における同名の職務とは、かなり趣を異にしている。官房総務課長には「所管行政に関する総合調整」「所管行政に関する企画」などというマネジメントの中枢的な業務があり、官房会計課長は、省全体の予算の作成という重要任務がある。そして、官房

秘書課長の所管事務は、

1、機密事項

2、職員の職階、任免、分限、懲戒、服務、給与、その他の人事並びに教養及び訓練

3、大臣及び事務次官の官印並びに省印の管守

4、栄典、表彰及び儀式典礼

いわゆる秘書的な業務よりも、中心の仕事は人事であり、風越の生きがいもそこにあった。

自分の席に戻った風越は、引出しの中から、カードの束をとり出し、机の上に並べはじめた。それは、名刺の半分ほどの大きさのカードで、めばしい役職者の名前が一枚に一人ずつ書きこまれている。

そのカードをにらんでいると、風越には、人名の男たちの風貌・性格・特技などが浮かび上ってくる。そこで、机の上に組織図をえがきながら、適任のポストへカードをふりわけてみる。

とたんに、カードが叫び出す。

「おれには、役不足だ」

別のカードは、泣き声をあげる。

「人ぼくには、荷が重すぎる」

そこでまた、カードを配り直す。

はたからみていると、まるで、トランプのひとり占いをたのしんででもいるようであった。

風越は、何年も前から、そのカード配りをやってきていた。このため、局長クラスの人名を記した古いカードなどは、手あかに汚れたり、変色したりしていた。ただ、かつてのカード配りは、大臣にもいわれたように、予想屋的であった。理想の人事とうたってみようと、しよせんは、机上のゲームであった。

だが、人事権をにぎる課長となり、さらにその二期目を迎えようとするいま、風越のカード配りには、熱気がこもった。カードが置かれるたびに、現実にはひとが動かされる。そして、あるひとはよみがえり、あるひとは生きながらに葬られる――。

鬼気というか、目に見えぬ戦慄でも走るのか、風越がカード配りを始めると、秘書課の中は、しんと静まり返った。

初夏は人事異動の季節でもあり、よけい、風越のカード占いが気になる。せきばらいも遠慮して、だれもが息をつめ、わずかの空気の動きまでおさえてしまったかのようにであった。

静かになると、隣りの会議室の議論の声が、壁越しにきこえてくる。そこでは、週に一度の法令審査委員会が開かれ、政策論議が行われていた。

はげしい議論の声に、風越は耳をすました。

へやってる、やってる。どいつが、いちばん、ほえてるのか

風越は、カードの束を置くと、ワイシャツのボタンをもうひとつはずして、風を入れた。

暑いだけでなく、熱い夏が、また、やってきた。はげしい議論の声は、蟬しぐれに代る通産省の夏の風物でもあった。お荷物である国会から解放され、一方、新政策の編成期を秋に控えたその季節は、官僚たちが新政策づくりに燃え上る最も熱っぽい季節でもある。窓から見えるプラタナスの青葉若葉の勢いに負けぬほど、省内の若手たちは芽をふき、青くさいほどの議論が、古っぽい建物に溢れ返る。人事を気にしながらも、それ以上に、全省がいきいきとした活気に包まれる季節であった。省内これ熱気の渦といってよく、その渦の中心となるのが、法令審査委員会である。

ふつう、新政策づくりは、まず各課の若手が、自分で練り上げた提案を、それぞれの局の局内会議に持ち出すところからはじまる。

その会議では、だれもが、自分の提案を通そうとやっきになり、はげしい理論闘争がくり返され

る。それはまた、提案者たちの能力を^{ふん}節にかける闘争でもあった。そのたたき台に耐えるだけの内容と裏づけを持った提案だけが生き残り、局の提案として、法令審査委員会へ付託される。

委員会のメンバーは、有能な若手の中からさらに選び抜かれたエリートたち、ふつうは、各局総務課の首席事務官から成る。彼等はそれぞれの局を一身に代表して、その提案を通そうというのだから、だれもが、ひくにひけない立場にある。もともと、それは天下国家を論ずる議論ではあるが、議論に勝つか負けるかは、その若手の将来を占うことでもある。節に残ろうと、男たちはむきになって猛烈なやりとりをくり返すことになる――。

風越は、微笑を深めながら、古びた壁に目をやった。壁を透視し、委員会の空気が手にとるようになる。

議論をリードしているのは、少ししわがれた特徴のある声。庭野であった。とび交う議論の中でも、その声は、地下水の浸み出るように続いている。別にオクターブを高めるわけでもなく、一本調子。しかし、腰の強い声である。

そのうち、他の声が沈黙しはじめ、しわがれた声だけが、なお念には念を入れるように続く。じっくり攻め上げて行く声であった。

議論の内容はわからぬが、風越は二度三度うなずいた。

へよくやっている。やっぱり、おれの見こんだだけのことはある。

庭野は、風越が早くから目をつけてきた男である。たまたま、出身高校が同じ二高というだけではない。その人物に、見どころがあった。

庭野が石油課の事務官のとき、タンクローリー車の所管について、運輸省とやり合ったことがあった。

運送業務だから、所管は当然、自分の側にあるとする運輸省は、通産省側の申し出を気がいい扱いせんばかりであった。これに対し、通産省側は、石油の生産流通は運輸的側面と密接に結びついており、タンクローリーだけははずされたのでは、一貫した石油行政がとれないと主張した。典型的な権限争議である。大義名分の争いであると同時に、ナワバリ争いでもある。

このとき、庭野は、毎朝、運輸省へ交渉に出かけた。話になってもならなくても、相手の課長席にはりつく。一日として欠かさなかった。このため、通勤定期をもじって、「通産定期」とあだ名をつけられた。

庭野は、ただ、ねばるだけでなく、相手の面子^{メンツ}を立てることも考えた。そして、タンクローリーは、石油の「運送」ではなく、石油の「移動」を扱うものだという定義をつくり、とうとう通産省へ所管を移してしまった。

一事が万事、その調子で、アイデアもあれば、行動力もある。次官コースを行くべき男だと、風越は見た。風越自身が、がむしゃらに突き進みはするが、根気よく根まわしするというのは、にが手である。それだけに、よけい、庭野を買う気持も強かった。庭野の結婚のときは、仲人もつめてやった。

壁越しに、しわがれた声が、なお続いている。

「庭野のやつ……」

風越は、いかにも「愛いやつめ」といった口調でつぶやいた。課員たちにもきこえる声である。

風越は、何でも口に出してしまふ。秘密主義のベールをかぶりやすい人事についても同様で、思っていることを、すべてさらけ出す。進んで、まわりの反応や意見を待つという行き方であった。それによって、新しい評価や情報が得られれば、それは、より公平な人事に役立つばかりでなく、人事通としての風越の情報蓄積量をふやすことになる。

隣室からは、庭野の意見に反駁する声がかえった。

議論の声が重なり合い、勢いを得たように走り出す。それは、風越に巨大な列車の地ひびきの音を感じさせた。日本経済という重い大編成の貨物列車をひっぱって行く音である。威圧するような声もあれば、かん高い声もあった。それでもなお、庭野のしわがれた声は続いている。

高い声をきいている中、風越は一シーズン前の法令審査委員会をリードしていた牧順三のことを思い出した。土佐生まれ。一高から東大。高文ではずばぬけた成績をとった秀才である。鋭い理論家で、議論でひけをとらない。やや女性的な、かん高い声で攻め立てる。庭野とはちがい、先制攻撃型で、論ずるに足りぬ相手だと思ふと、もう見向きもしない。

官房総務課の首席事務官をつとめ、超特急ユースを突っ走るかに見えたのだが、胸を病み、当人の希望もあって、いまは外局である特許庁の商標課長という閑職に出ている。そこは、審査や審判に携わる技官たち中心の役所であり、出世をめざす事務官キャリアの行くところではない。むしろ、ウバすて山であり、一步足をふみこめば、たちまち主流から名を消されてしまいうさである。

その証拠にと、風越は、机上にある人事カードの配置に目を戻してみた。本省の主要ポストにほぼカードを並べつくしたというのに、牧の名はなかった。残してある束を繰って、ようやく下の方から、「牧順三」の名札を見つけて引き出した。

「特許庁の牧は、最近どうしてるか知らんか」

風越が大きな声でいうと、古手の事務官の一人が答えた。

「たしか、あちらの総務部長の話では、外地へ転出希望があるということでした。大使館付でも、ジェットロでもいいから、パリへ出たいそうなんです」

「体はもう治ったのか」

「治り切つてはいないようです」

「それじゃ、死に行くようなものじゃないか。それに、うちは外務省じゃない。海外などへ出たら、永久に忘れられてしまう」

秀才によくあるように、一気に人生をあきらめてしまったのか。それとも、くさって乱心したのか。

「バカめ。バカのバカだ。二重にバカだ」

へ壁の向うの議論を思い出してみろ」と、いいたかった。指は「牧順三」のカードを引き裂きそうであった。

「牧を呼べ！」どなつてから、風越はいい直した。「いや、おれが会いに行つてくる。いったい、どんな料簡なのか、とことん、問いただしてやる」

風越は、席を蹴つて、立ち上った。

机の上には人事カードを投げ出したままである。

風越信吾は、頭も高いし、腰も重い。どちらかといえば、ひとを呼びつけるタイプの男なのだが、それが腰を上げたのは、ひとつには、人間をその持ち場でのありのままの姿で眺めるべきだという考え方があつたこと、それに何より、特許庁が百メートルほどしか離れていないところにあるせいであつた。

昭和三十年当時、通産省は、会計検査院の古ひた建物に間借りしていた。天井が低く、息がつまりそうなビルである。ヒマラヤ杉が両側に並んでゐる玄関を出ると、坂道がくの字に曲りながら、ゆるやかに下りて行つてゐる。特許庁は、その下り坂を下り切つたところにあつた。

風越は、ゆっくり大股に歩き出した。その道が自分ひとりだけの道でもあるかのように、背をそらせ、両手を振つて、昂然と歩く。陽光に角縁の眼鏡が光つた。「少し角ばつたお顔ですので、

それではよけい、いかつい感じになります」と、眼鏡屋には遠慮がちに諫められたのだが、「四角なものは四角くていいんだ」と、風越がとり合わなかった眼鏡である。

風越の大きな靴は、石だたみをふみ鳴らした。下り坂のため、いっそう背をそらすので、まるで仁王さまが街へ下りて行くといった恰好である。

風越は、骨太で、柄の大きな男であった。相撲が好きで、若い事務官当時は、給仕たちを相手に、相撲ばかりとっていた。風越のような東大・高文組は、いわゆるキャリアといわれ、キャリアだけの世界にとじこもり、仕事上の競争に熱中するのが、ふつうである。それなのに、給仕と相撲ばかりとっているようでは、うだつの上らぬ男と見られた。

その上、風越は、女子挺身隊員として来ていた商家の娘が好きになったが、終戦早々、いきなりその娘の家へ出かけて求婚。腕づくでさうようにして、新しい任地である大阪へ連れて行ってしまった。掠奪結婚であったが、ついでに一言、

「敗戦で当分は仕事らしい仕事もない。結婚ぐらいしか、することは残ってないからな」へらず口をたたくせがあった。

大阪へ行ってからも、しばらくはまた相撲ばかりとり続けた。出世競争には関係ないと見られていたが、それが、十年経ったいま、同期でトップを走るところへおどり出ていた――。

くの字坂の半ばまで来たとき、守衛の一人と行き会った。風越は、片手をあげ、どなるようにいった。

「おうッ、元氣か」

守衛はとび上るようにして、「はいッ」

「息子はどうか。うまく、つとめとるか」